

第20回宇宙政策委員会 議事録

1. 日時：平成26年3月6日（木） 10:00-11:10

2. 場所：内閣府宇宙戦略室大会議室

3. 出席者

(1) 委員

葛西委員長、松井委員長代理、青木委員、中須賀委員、松本委員、山川委員

(2) 政府側

山本内閣府特命担当大臣（宇宙政策）、後藤田内閣府副大臣、亀岡内閣府大臣政務官、松山内閣府事務次官、阪本内閣府審議官、西本宇宙戦略室長、中村宇宙戦略室審議官

4. 議事録

冒頭、山本大臣から以下のような挨拶があった。

山本大臣：

- ・平成25年度補正及び平成26年度予算については、本委員会でしっかりご議論いただき、厳しい財政状況の中でも所要の予算を計上できた。感謝申し上げます。
- ・戦略的予算配分方針で重点化事業と位置付けた準天頂、SSA、新型基幹ロケットは着実に進んでいると認識している。広域災害衛星ネットワークについても、各府省との連携体制を構築して、しっかりと前に進めたい。
- ・今後とも、各省と連携しつつ、宇宙政策の司令塔として戦略的予算配分方針等を通じて、宇宙政策委員会の考え方を各府省の宇宙政策に反映していくよう取り組んでまいりたい。

(1) 宇宙輸送システム部会からの報告

宇宙輸送システム部会からの報告について、資料1-1、資料1-2、資料1-3に基づいて山川部会長より報告を行った。主な意見は以下の通り。
(以下、○質問・意見等、●回答)

○宇宙輸送システム長期ビジョンについては、非常に長期を見渡したストラテジーを進めている点は高く評価したい。輸送機あるいはロケットエンジンなどのパーツの開発については、日本は強かったと思うが、システムとしてインテグレートして、それをマーケットにまで広げるという視点で議論されているのは大変よいと思う。宇宙利用市場や必要性を中心に据えてどういう物を輸送するのかという観点から我が国に必要な輸送機を開発していただきたい。さらに、我が国の自律性の確保や、国際性の観点から、輸送機開発の位置づけを明確にするよう検討していただきたい。(松本委員)

○宇宙輸送システム長期ビジョンの検討の中で、輸送機などの開発コストの規模についての議論は行われたのか。(中須賀委員)

●具体的なコストについては、まだ議論が十分ではない。(山川委員)

(2) 宇宙科学・探査部会からの報告

宇宙科学・探査部会からの報告について、資料2及び資料2参考に基づいて松井部会長より報告を行った。主な意見は以下のとおり。

- イプシロンロケット2号機に搭載するジオスペース探査衛星(ERG)について、概算要求額に比べ、当初予算案が40億円程度減額されているのは、大きなインパクトがあったのではないか。国際協調をやっているプロジェクト等が優先され、ERGにしわ寄せが行った印象を受ける。ERGについて、試作を延ばすのか、打ち上げを延ばすのかなど、どのように対応するか議論を行ったのか。(松本委員)
- 文部科学省の予算の中で具体的にどう手当てしていくか、あるいはコミュニティとしてどう対応していくか等、はっきり決まっていない。ただ、早急にどう対応するかを部会として検討しなければいけない。非常に厳しい。(松井委員長代理)
- 平成28年度にBepi Colombo打ち上げと資料に記載されている。本来は、その前の年にERGを打ち上げる予定であった。Bepi Colomboを上げる予算は国際協約上絶対に必要だということになると、ERGについてはさらに延びることも懸念される。宇宙科学・探査部会ではこの点について具体的な議論を行ったのか。(松本委員)
- そこまで議論する時間はなかった。ERGに係る対応については、私も具体策を関係者から聞いて、これから考えていかねばならないと思っている。(松井委員長代理)
- ERGの減額は、宇宙科学・探査部会の立場だけではなく、宇宙輸送システム部会の立場としても問題である。イプシロンロケットは高頻度に低コストで打ち上げて宇宙開発利用の敷居を下げるのが売りだった。イプシロンロケットの初号機が打ち上げられたのが昨年9月であり、同ロケットの2号機でそれから2年後の平成27年の暮れにERGを打ち上げるという当初予定がさらに延びると、高頻度と言っている割に3年に一遍ぐらいしか上がらないことになる。このため、何とか当初予定に近い形で打ち上げることができればと思っている。(山川委員)
- ERGは太陽活動も観測することになっている。今はちょうど太陽活動が変化している重要な時期である。太陽活動のデータは気候変動問題にも非常に関係が深いものであり、ぜひ打ち上げたいというのがコミュニティの意見である。ERGの打ち上げを延期するのは余りにも影響が大きいので、何とかして当初予定に近い形で実施するためにどうすればいいのか、宇宙戦略室あるいは文部科学省とも相談しながら検討していきたいと思っている。ただし、現時点で具体的な考えがあるわけではない。(松井委員長代理)
- ERGもそうだが、小型科学衛星シリーズの多くはコストオーバーランになっている。宇宙科学・探査ロードマップでは、中型、小型、さらに小さいものの三つに分けて進めることとしているが、今回の教訓を踏まえ、コスト管理について、新たなやり方が検討されているのか。(中須賀委員)
- それも含め、まさにいまボトムアップでこういう議論をやっていると思う。(松井委員長代理)
- 例えば、最初に予定していたコストを超えたらプロジェクトをストップするようなことは議論しているのか。(中須賀委員)

- ERGについては、当初予算の中で何とか上げるためにはどうすればいいのかの方策を色々と検討し、足りない分をどうするかの話をしなさいといけなさいと考えている。また、一般論として、コストを議論する際には、ロケットの打上費用や能力も考慮していかねばならない。そういう議論を宇宙科学・探査部会でやっていきたいが、当面はERGを何とかしないと先に進めないのが現状である。(松井委員長代理)

(3) 宇宙産業部会からの報告

宇宙産業部会からの報告について、資料3-1、資料3-2、資料3参考に基づいて中須賀部会長代理より報告を行った。

(4) 調査分析部会からの報告

調査分析部会からの報告について、資料4-1、資料4-2、資料4参考に基づいて中須賀部会長より報告を行った。主な意見は以下のとおり。

- 個人的経験だが、在外公館にいる方々は、その国で進められている宇宙関係の取組み自体を把握していない場合がある。よって、在外公館の取組みを待っているだけではなく、外務省を通じてかもしれないが、内閣府から情報収集等を積極的に依頼しない限り、宇宙というキーワードが在外公館にいる方々の中に入り込んでいかない可能性がある。(山川委員)

- ご指摘の通りで、まさにそういう議論が部会でもあった。ある国の在外公館等に精力的に宇宙に取り組んでくれる人がいれば、その国との連携や情報取得が大きく進むものである。宇宙は、しっかり取り組めば、興味を持ちやすい分野である。したがって、日本側から情報収集等の仕事を在外公館等に依頼し、宇宙に興味を持つきっかけを作ることが大事だと考える。(中須賀委員)

- 在外公館にいる人次第であるというのはその通りだと思うが、もう少し積極的に、内閣府の宇宙戦略室で、重要だと思う国・地域に若手の外部有識者等を派遣するような仕組みができないか。その際は派遣する人の身分や宇宙戦略室との関係を明確にすることが重要と考える。数多くは派遣できないであろうから、ここはと思う地域に絞ってはどうか。(松本委員)

- 現地を実際に訪れて手に入れられる情報量は、行かない場合に比べ格段に多くなる。定期的に各国を訪問すると、その国の宇宙の現状や課題がよくわかる。(松井委員長代理)

- 定期的に各国を同じ人が訪れることで、情報を獲得だけでなく、相手国に顔を売ることができ、信頼関係ができる。海外はそのようなことに取り組んでおり、国際的に勝負していかねばならない以上、日本としても同様の活動に取り組んでいかねばならない。(中須賀委員)

(5) 宇宙政策委員会の今後の検討体制

宇宙政策委員会の今後の検討体制について、資料5に基づいて事務局より説明があった。資料5「宇宙政策委員会の今後の検討体制(案)」については、委員会として了承された。

以上